
魔法騎士バラム列伝 ～帝国の騎士～

鳴る神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法騎士バラム列伝　　（帝国の騎士）

【Nコード】

N1924M

【作者名】

鳴る神

【あらすじ】

騎士、それは忠義の者。

騎士、それは主人に尽くすもの。

今、転生した一人の男が騎士となりて一つの物語に投じられる一石となる。

波紋はどこまで大きくなるのか？

※独自設定、更新不定期、原作乖離などがあります。
気に入らない方はバック推奨。

プロローグ（前書き）

やっちゃいました。

後悔はしたけど反省はしない。

筆が進まないので新しく書いてみたよ。

でも相変わらず駄文だよー

それでもよろしければどうぞ。

プロローグ

「あぶぶー」

……？

なにやらおかしいぞ？

俺は「さてと」と言っただつたんだが……

「あういいっあぁ……あう？（もう一回……アレ？）」

なんだこの声？

なんだか俺の声が変な気がするぜ……

目を開けている筈なのに辺りがぼんやりとしか見えないし、声も上手く出せない。

幼い——そう、まるで赤ん坊の様にまだ声帯が出来ていない様な感じ……

——って。

「あういつ

あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああつ！！？（なんじや
りやあああああああああああああああああつ！！？）
あああああああああああああつ！！？」

そこそこ筋肉のついてた筈の体はぷにぷにボディになっており、しかもサイズダウン。

手足を動かそうとしてみるが大して体は動かないし、オマケにぼんやりとしか辺りを見ることができない。

普段できた筈のことができないというのはかなり怖いし、ましてや辺りを確認することすらできないのだ。

パニックった俺は悪くない。

《あーテストス。貴方は生前の行いも善く、人よりも苦勞した人生を送っていたので、二度目の生を与えます。また、その世界で天寿を全う出来るように、とある世界で竜に跨り戦場を駆け抜けた契約者の武具一式を贈ります。頑張って第二の人生を全う出来ることを祈ります（笑）　バーイ　カミさん。》

そして一通り絶叫し、混乱が収まりかけた時に直接頭に響く謎の声。

（……っはあ！？　なぜだナゼダ何故だっ！？　俺の長年連れ添った体はどうした！？　目が覚めたら赤ん坊でした（笑）、とか冗談じゃねえぞ！？　それになんだよさっきの声！？　とうとう幻聴まで聞こえてきたのか！？　転生？　嫌な予感がびんびんだぜ！？）

というか周りのことがわからないのって怖すぎる！

赤ん坊が泣くのは安全な母の胎内から出されて不安で泣くと聞いたことがあるけど、メッチャ怖い！！

と俺が再び混乱している間にパタパタと足跡を響かせながら誰かが近寄ってきた。

「■■■■！？」

え。

「？」

なんだか聞いたことがないはずなのに懐かしい感じがする……

その歌を聴きながら揺られていると段々まぶたが重くなってくる。

この体で思いつきり泣いたせいか、とてつもなく眠い。

そして俺は自分の意志とは関係なく眠りに落ちていった……

この日俺が最後に感じたのは暖かい温もりと、なんだか安心する匂いだった……

一話 幼少期、鍛練（前書き）

続編だよ

説明回です。

駄文注意！

一話 幼少期、鍛練

「だっ、しゃあああああああああッ！！」

ブオンツと、手に持つロングソードが空を斬る。

俺が手に持つ剣は幅広の刀身に蒼いラインがあり、振るうと蒼い軌跡が宙に描かれる。

その蒼い軌跡は、情け容赦無しに目の前の剣を持った老人を両断せんと迫る。

しかし、我ながら中々の速さで繰り出されたはずの横薙ぎの剣はあっさりと相手の剣に防がれ、お返しとばかりに自分よりも速い速度で斬りかかれた。

「ふうんッ！」

「はうあ！？」

慌てて剣で防ぐが、踏ん張りが足りずにガードごとふっ飛ばされる。

「むぎゅ！？
　　ゝゝッ！　　こんにやろう！　　【ブレイジングウイング！】」

後ろの木に叩きつけられ思わず奇声を発したが、仕返しとばかりに飛び出しながら剣に魔力を注ぎ、力ある言葉で剣に込められた魔法を発動する。

ボッ！　と30センチ台の炎弾が発生し、老人目掛けて高速で飛んでいく――が。

「は？　――ぷげろ！？」

スパンッ！　と、そんなの関係ねえとばかりに一刀両断された。それなりに魔力を注いだはずの炎弾を、なんの変哲も無いはずの剣で。

そんな俺が間抜けな顔して惚けている隙を相手が見逃すはずがなく、どんな歩法か分からないが一息の間に近寄られ、クルリと体を一回転させ威力を増した蹴りを腹に叩き込まれてしまった。

再び奇声を上げながらビタンッ！　と木に叩きつけられてしまい。ぽてん、と地面に倒れ伏す。

「ぬおおうつつ、ナカが逆流する……！」

蹲ってプルプルと震える俺に、老人ながらがっしりとした体つきに、白髪の手。鋭い眼光に合わないにたとえながら腰の鞘に剣を納めてやって来る。

（痛っうううう！　こんのジジイ！　何時か殺す！！）

「ジジイ……ッ！　前途有望な若者になにすんじゃあ……ッ！？」

「えゝゝ☆、儼ってばジジイじゃから手加減とかムリって感じゝ☆、てゆーか貴様の寿命を寄越せって感じ？　キャハッ☆」

皺くちやのジジイが腰をくねくねさせながらキャピキャピするのはハッキリと言ってキモイ。

こんなジジイだが俺の育ての親であり、師匠でもある。

俺は捨て子だったらしく、人の寄り付かない森の前に捨てられてい

たらしい。

俺の泣き声を聞いて偶々薬草を取りにきていたバアさんに拾われ今にいたる……ジジイにはあまり感謝していないがな！

赤ん坊の時は言葉がわからなかったので（英語？）その習得に大幅に時間をかけた。

特に目立つようなこともせずに幼少期まで過ごした……しかし、俺の受難はここから始まった。

体がある程度できてくると「おい！ 儂が稽古つけてやるわい！」と押し切られ、なし崩しに修練をしている訳なんだが——なんでこんなに強いんだよこのジジイ！？

年寄り相手だし本気出しちゃ不味いよな〜って、余裕ぶっこいてたのは始めだけ。

優しく木剣で斬りかかった俺をワンパンKOし、そのあと水をぶっ掛けられて強制的に覚醒させられ、そのあと5時間ぶっとうしでスーパーフルボツコタイム。

ほうほうの体で帰宅し、バアさんに聞いてみたところ。

実はあのジジイ昔は詩に歌われるほどに有名な騎士で、当時は最強と謳われた騎士だったらしく『万夫不当』とまで称えられたらしい。ちなみにバアさんはジジイの『魔法使いの従者』というパートナーで、珍しい付与魔法^{エンチャント}の使い手であり、若いころはブイブイいわしてたらしい。

なんという武闘派夫婦……

「ハッ！ 俺は将来自堕落に生きて、美女に死に水を取ってもらうのさ！ ……つかキモッ！ 「キャハッ☆」じゃねーよ！ さっさとくたばれ！ そして遺産を寄越せ！！」

「儂死なないもーん、あと百年は生きるしー？　むしろお前が死ぬばあ？」

今ではそこそこのいい感じに戦えるようになってきたし、体の効率的な動かし方に慣れてきた。

鍛えれば鍛えるほどに強靱になっていく体や、まさにファンタジーな魔法や気。

こんなファンタジーな世界に生まれたらどこまで自分が強くなるのか興味がある。

そう思えばジジイとの鍛練も中々楽しい。

まあ負けるのは悔しいが……

あと俺が神？　に与えられた武具は凄まじかった。

この世界にきた時に俺の背中に黒い二重円が刻まれている、その円の内側には剣でできた十字架のようなものがあり、外周部に様々な武器――剣、短剣、槍、杖、斧、鎌、メイス、ハンマー、ポールアックス……そのシルエツトがぐるりと描かれている。

そのシルエツトの数だけ武器が俺のナカにあるらしく、その総数65種全てに魔法を込められている魔具であり、怖るべき力を持った魔剣達である。

今はその多種多様な武具達を全てを大体使えるようになってきた。まあそこまで練度が高くはないが……

俺が得意な武器は剣、槍、ポールアックスであり、この三つはジジイ相手でもいいとこまで行ける程であり、密かな自慢なのだ。

「はあ！？　やんのかジジイ？　こっちが敬老精神発揮して手加減したら調子に乗りやがってよお？　やっちゃんよ？　サクツと殺っちゃうよ？」

「はあ？ 手前が儂に勝つう？ 蹴られてただでさえバカな頭が更にバカになったのか？」

「んだとゴラあ？」

「ああん？ やんのか？」

「上等だゴラア！？」

「かかって来いやああああああ！！！」

そして二人同時に殴りかかろうとした瞬間――

ぷち

っとバアさんの生み出したゴーレムに潰されて鎮圧される。

これやって始めて鍛練が終わる気がするだから不思議なもんだなあ……

これが何処かのファンタジーな世界に転生した俺ことバラム・フェッター、7歳の日常である。

一話 幼少期、鍛練（後書き）

久しぶりでなんだか書きづらい……
まあ楽しく書いていきます。

二話 初実戦VS竜種（前書き）

なんという遅筆……

そして大したクオリティじゃないorz

それでもよければどうぞ。

二話 初実戦VS竜種

「つ・い・て・ねえええええッ!？」

ヒュゴッ!

俺の頭の上を通り過ぎていく風の弾丸。

その威力は前方に生えていた木を薙ぎ倒して霧散する。

木をも薙ぎ倒す風を放つのは”竜”。

言わずと知れたファンタジーの代名詞であり、多くは強力な力を持つものである。

んで、俺がなぜそんな化物に追われているかと言うと……ぶっちゃけジジイのせいである。

あれは、日課の鍛練でようやく五回に一回ほど勝てるようになってきた時のことだ……

……

……

…

「ふんぬうッ!!」

「ぺぽろっ!!?」

ビタンッ!!

どうも。最近壁に叩きつけられるのにも慣れてきたバラム・フェツター十歳です。

日々叩きつけられたおかげで受身の取り方はすでに達人級だよ？
頭から落ちても受身ができるんだ……感謝はしてないがな！

しかし、今回は良いとこまで行っただけ……ジジイ
まじパネえっす。

俺は全力で強化しているけど、もう歳で年々力が衰えてるはずのジジイと互角なんだぜ？ 理不尽じゃね？

最近はずっと勝ちを拾えるようになってきたけどなー。
辛勝でしか勝てんだろうけどね。

多分実戦なら経験不足でアッサリ負けるだろうけど……

「ふうー。お前も最近強くなってきたのう。そろそろあれをしようかの……？」

ドカリと、地面に倒れている俺の上に座りながらタバコを吸うジジイ。

みんなー！ こいつこれでも昔は騎士だったんだぜ？

今じゃタバコに酒や博打までやって、趣味はいたいけな少年をボコることなんだぜ？

なんという鬼ちゃ「せいッ！」

「ホワッ!？」

めぎょッ!! っと人体から出そうにない音——いや、出しちゃいけない音が俺の背中が奏でた。

「~~~~ッ!!? 何すんじゃジジイ!!? こんなにボロボロな少年に手え出すとか何考えとんじゃああ!？」

「ん? 一発で気絶しないとはタフになったの……」

俺の悲痛な訴えを無視し、ゴスゴスと容赦なく降り注ぐ鉄拳。
へろへろの体で防げるわけも無く、的確に急所を抉っていくジジイの拳。

これヤバクね?

「ちょ! まっ、やm「シャッ!!」ゲホウ!？」

喋ろうと息を吸い込んだ瞬間。鳩尾に突き刺さるボディブロー。
背中に突き抜けるような衝撃を受け、俺の意識はブラックアウトした……



「oh...Jesus」

思わず英語になってしまった。

辺りは家の庭からほの暗い森にビフォーアフター。

ギシャーギシャーと謎の音が響くのが不気味さを引き立てる。

ここを探索したら絶対新種の生物が見つかりそうだよなー

いや。現実逃避は止めよう。

俺の目の前には怒り狂ったドラゴンが一匹。

その目は血走り、鼻息は荒い。

どうやら風竜のようで、竜種が恒常展開している風の障壁が辺りの木々を粉碎している。

A A A A ツ ツ ! ! 「 G O ッ R A A A A A A A A A A A A A A A

物理的な圧力を伴った咆哮が響く。

どうやらテリトリーを荒らされてお怒りの様子で。

すぐさま竜のテリトリーから逃げて森から出ようとしたんだが、この竜のテリトリーを恐らくばーちゃんの付与魔法でぐるりと一周するように結界が刻まれ脱出不可。

ばーちゃんの結界はものすごく頑健で、一瞬破壊することはできない。

時間をかければ破れるだろうが、その間に竜にパツクリやられてしまう。

そして服の中にいつの間にやら「ドラゴンを殺れ。　バーイ　ダン　ディなお爺様」というふざけた手紙と、「今晚はシチューです。早く帰ってらっしゃい。　ばーちゃんより」という心温まる手紙。

まずジジイは殺す。返り討ちかもしれんが……

そしてばーちゃんも結界張ったってことはグルだよな？

ジジイを止めて欲しかったです……あつ、でもシチューはいただきます。

帰った時のことを考えながらチラリと後ろを見る。

馬鹿デカイ蜥蜴のような体に堅そうな鱗。

刺々しい尻尾と鋭い爪。

翼を生やし、デッカい牙が生え揃った口からは風の塊を撒き散らしながら俺を執拗に追いかけてきている竜が見える。

……うん。勝てる気がしないね。

大体あんなの騎士団とかが複数人で狩るようなやつだろ！？ それを最近十歳になったばかりのガキにやらせるかよ普通ッ！？

そんなこんなで時間稼ぎで森の中をぐるぐると魔力で強化し全力で走り続けて、かれこれ20〜30分か？ 魔力も半分以上消費し、体力もヤバイ。
正に絶体絶命。

時々召喚した『領主の狩猟刀』という小振りな鉞のような剣に込められた衝撃波を飛ばす魔法。

【ケルベロスファンク】で翼を狙って放ち、距離を離しているが…
…何時まで持つかわからん。

あわよくば翼に傷を与えようとして使った【ケルベロスファンク】だが、いくらただ衝撃波を飛ばすだけの単純な魔法とはいえ、竜種が恒常展開している障壁であっさりと防がれてしまった。

あれより上位の魔法が込められた武器ならば破れるだろうが…今の魔力量では厳しいだろう。

どちらにせよそろそろ魔力も限界。

これ以上逃げれば迎撃用の魔力が無くなるし…

やるっきゃないか……

「【ケルベロスファング!!】」

ボバツ!!

そうと決まれば【ケルベロスファング】を複数放ち、壁のようにして一瞬だけ竜の目をくらます。

その隙に距離をとり、逃げ回っている間に発見した少し開けた場所で待ち受ける。

不意打ちの方がいいかと思ったが、今の疲れた俺では完璧に気配を消すのは無理。

ならば正面から油断している間に一撃で殺る。

迫る竜に向けて腰を落とし、踵を上げて何時でも動けるように構える。

今から戦うのは、今まで狩りで相手にしたような生優しいもんじゃない。

弱肉強食。正に殺るか殺られるか。

ビビリそうな心にパチンツ、と頬を叩いて気合を入れる。

こいつは強い。それは認める。

今も頭の隅で逃げろと本能が囁く位だ。

しかし。ジジイの本気の殺気には劣っている。

つまりはジジイより格下。まだまだ世界には上には上がいるって事

だ。

——なら負けらんねえ。

生憎と俺はジジイとばあちゃん以外に負けるつもりは今のところ無い。

それが師事した二人のためであり、俺の意地だ。

それにこいつに負け、死んじまったらそこで終わり。

二度と夢を叶えることもできないし、俺はまだまだやりたいことがたくさんある。

訳も分からず生まれた魔法があり、モンスターがいるようなファンタジーな世界。

旅がしたい。

亜人とやらに会ってみたい。

この世界の名所を回ってみたい。

魔法を使いたい。

戦いたい。

強くなりたい。

ジジイに勝ちたい。

そして『最強の騎士』になりたい。

ジジィよりも上、このファンタジーな世界で名を残す騎士になる。
その夢を叶えるためにも、こんな所で負けらんねえ……負けちゃな
らねえんだよっ！

「シャッア！！ やってやんよ糞トカゲえッ！！ 哺乳類なめんじ
やねえっ！！」

竜がこちらに向かって来るのを見ながら俺は自分の背中を意識する。

背中に刻まれた二重円。

その円を循環させるように魔力を流し込み、体に封印された武器の
名を口にする。

「ホイール…リロード『火鱗の戦斧！』」

体の内でガコン、ガコンと歯車が廻る音がし、背中の円が熱を帯び
る。

現れたのは武器。

銘は『火鱗の戦斧』。

神話の時代、最強の堕天使の鱗から作られたといわれる武器だ。

その形状は長く湾曲した刃が柄の先についており、刃の部分だけで
標準的なロングソード並の長さがある長大なポールアックスである。

俺の持つ武器の中でも上位の部類であるこの武器と、込められた魔法ならあの竜の障壁を斬り裂き、鱗を穿ち、肉を断つだろう。

続いて武器に魔力を流し込み、魔法を発動させる。

「我が身よ高まれ！ 【ブレスオブベリアル！！】」

魔法を発動させると赤いオーラが体の包み込み、体に力が湧いて来るのがわかる。

【ブレスオブベリアル】は自らの筋力や武器の鋭さを上げる強化魔法だ。

元から使っていた強化魔法の【戦いの歌】と組合せた時の斬撃は桁外れ。

以前は木刀で岩を両断したことすらある一撃。

これが効かないようなら俺に勝ち目はない。

「退けば死あるのみ、なら俺は逃げねえ……障害があるなら斬って碎いて進むのみ」

自分の体よりデカイ『火鱗の戦斧』を腰だめに構える。

竜は既に近くに来ていた。

目潰しで怒りが増したのか、木を薙ぎ倒しながら猛スピードで突っ

込んでくる。

今更ながら怖い。

小動物は狩ったことはあるが、こちらを始めから殺す気で向かって来る相手は初めて。

しかも相手は竜だ。プレッシャーが半端じゃ無い。

相手は俺を安々と殺せる能力を持ち、数々の戦いをくぐり抜けたであろう歴戦の竜。

対して自分は業物と言える武器を持ってはいるが、実戦が初めてのガキ。

彼我の戦力差は一目瞭然。

俺の優位性は状況に応じて武器を変えることができ、武器ごとに違う魔法が使えるってことか？

しかしその優位性も今の俺では即座に武器を召喚できないので意味が無し。

ならば短期決戦。

「手を見切られる前に速攻で決めてやる……っ！」

『火鱗の戦斧』を腰だめから大上段に構え直し、ありったけの魔力を込めていく。

俺の魔力を貪欲に吸収し、歓喜の声を上げるようにギチギチと震える『火鱗の戦斧』。

一撃。

全魔力で強化した大上段からの振り下ろし……それで決める。

いくら竜でも、怒りで周りが見えてない今のうちに真正面から頭をかち割れば死ぬだろう。

もしかしたら障壁を突破できないかもしれない。

障壁を突破したとしても堅い鱗で止められるかもしれない。避けられるかもしれない。

そうすれば待つのは”死”。

今になって嫌な事が頭に浮かぶ。

当たるのか？ 確実に？

斬れるのか？ 本当に？

殺れるのか？ 確実に？

「ハッ！ 俺ってこんなにビビリだったっけか？」

そんな考えを振り払うように声を上げる。

「俺は最強、故にこの一撃は誰にも防げない。この一撃は最速、故に誰にも避けれない……」

ただの自己暗示。
 だけど勝つ。勝ってみせる。

竜は目の前。

その口には今までとは比較にならない風の弾丸……いや。風の砲弾が渦巻いている。

小細工無用。

最大火力V S 最大火力。

純粹な力比べ。

ジジイも言っていた。

「力比べは氣合じやボケエツツ!!
わりなんじやあああツツツ!!!」
氣持ちで負けたらそこで終

思い出して思わず笑みが浮かぶ。

今までゴチャゴチャ考えてたのがバカらしくなった。

敵は一人で、己も一人。

お互い放つは一撃。

互いの最強の技がぶつかり合い、より強い方が勝つ。
なんて単純。なんて明解。

「俺か、お前か。勝負だ！ ク・ソ・ト・カ・ゲええええええええええ

ええええええええええツツ!!」

竜が放った風と同時に俺は自身の最速で踏み込み、戦斧を振り下ろした……

s i d e o u t

s i d e ジジイ

戦いの天才。

我が子を表すにはそれがふさわしい。

ある日、魔獣が跋扈する森でばーさんが拾って来た子。

その子是不気味な……ゾツとするような威圧感を放っておった。

そしてその威圧感を裏付けるように、背中に二重円と其れを一周するように刻まれた様々な武器の絵……

赤子はその身に武器を宿していた。

その全てがいずれも魔法が込められた魔剣や魔槍であり。

いずれも歴史に名を残すような伝説級の武器。

確かにこんな物を生まれながらに持った赤子は捨てられるかもしれない。

人は理解できぬモノに恐怖する。

ましてやあれ程の武具……一度見せてもらったが、いずれもかなりの数の人や動物を斬ったように見えた。

手入れがしてあるのに剣が人の脂で曇り、メイスは血の色で染まる

……

どれだけの数を殺せばああなるのか……百や千では効かんじやろう

……

それほどモノを斬った武器は自然と凄みや威圧感を帯びる。

それを複数も体に宿しているなら、自然と威圧感も出るじやろう。

儼も昔は名の通った騎士。

当然数多の戦場を愛剣と共に駆け巡り、数多くの敵を斬ってきた。

故に威圧感程度で赤ん坊を避けるような真似はせん。

しかし大抵の者には耐えられんじやろう。

普通の孤児院なんぞでも同じ……

じゃから身寄りの無い赤ん坊をばーさんと二人で育てていくことになった。

そのバラム・フェッターと名づけた赤ん坊は言葉を覚えるのは遅かったが元気に成長した。

活発で珍しい物には多大な興味を示す子で、危なっかしい行動をするようになってきた……

このままでは危険なことに首を突っ込みそうじゃし、自衛手段ぐらいはあったほうがいいじゃろ——と思って、無理やり剣の基本を教えこんだんじゃが……

——甘かった。

基本を教えれば真綿に水が染み込むが如く吸収し、自ら応用を編み出していく。

それが一種類なら……まだわからんでもない。

しかし剣、刀、短剣、槍、杖、斧、鎌、メイス、ハンマー、ポールアックス……これだけの数の武器で才能を発揮するのは並みではない。

特に剣、槍、ポールアックスの三つは他と比べても抜きん出ておった。

手を抜けば儂でも負けかねんほどに……

バラムは他にも弓や無手、気の扱いにも才を示し。

ばーさんから魔法の手ほどきも受け、そちらでも才を示しているらしい……

もはや此処まで来ると武の才——というよりも戦いに関する天才なのかもしれない。

それにここまで才を示されると欲が出る……

自らの後継として育て上げたい、そして自分を超えてほしい……ジジイのささやかな願い。

バラムも自分が強くなるのが嬉しいのか、同世代の者でなくとも投

げ出すような鍛錬を逃げる事なくやり遂げて行く。

今では手加減しているとはいえ、儂を負かすようになってきた……

そして教えることが無くなってきた頃。

近くの森に”名つき”の竜がいるという噂を聞いた。

この世界ではある一定以上モノを持つ者達には二つ名や仇名が付く。それが正義だろうが悪だろうが、はたまた動物だろうが、実力ある者にはその者の能力や容姿に関連した名がつけられる。

それは一種のステータスであり、同時に強者の証である。

たしかその竜についた二つ名は『堅風^{けんふう}』。

あらゆる攻撃を防ぐ風の障壁と、あらゆる敵を粉碎する禍^{まが}ツ風^{つかぜ}から由来する強力な風の竜。

森の中の幾多の生物の頂点に立ち、度重なる賞金稼ぎ・ハンター・果ては騎士団さえも退けた強力な竜……まさに実践練習に打ってつけの獲物。

バラムは儂としか戦ったことしかない。

故に自身の強さをいまいち理解しきれていないように見える。

最近のものはや並大抵の者では勝てんような領域にいるとゆうのに……
竜を討ち、これで自信をつけてもらおうと思ったんじゃ……

「まさか此処までとは……」

目の前に広がる光景は圧巻だった。

森を分断する切れ目。

バラムが全力で放った渾身の一撃は放った後に気絶したが竜を一撃で殺し。

それだけでは留まらず、地面を切り裂きばーさんの結界すら砕いて漸く止まった……

さっきの一撃には間違いなくバラムの才能を垣間見た。

もしかすると本当に儂を超え、歴史に名を残すかもしれない……

「こりゃあ、将来が楽しみじゃのう……」

さてと、バラムを起こすとするかの。

帰ってばーさんのシチューを飲まんといかんしの……

二話 初実戦VS竜種（後書き）

なんか変な文になっちゃった（泣）

ああ……さっさと本編入りたいです。

他のも鋭意創作中です。

感想なんかもよろしくおねがいします。

というか。

ドラッグ オン ドラグーン知ってる人いるのかな？

設定とか書いたほうがいいかな……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1924m/>

魔法騎士バラム列伝 ～帝国の騎士～

2010年10月8日13時34分発行